

左傳の思想史的研究

津田 左右 吉著

東洋文庫論叢第二十二。昭和十年九月東洋文庫發行。
 四六倍版七三七頁、索引二十五頁、英文提要十一頁。
 定價金七圓。

昭和二年、東洋文庫論叢の一冊として「道家の思想と其の開展」の大作を出版された津田博士は、其後専ら儒教思想史の研究に従事し、幾多の論文を發表され來つた。茲に昭和六年十月十一月の交、東洋文庫の東洋學講座に於て試みられた「左傳の思想史的考察」なる講演を更に發展して七百餘頁の大著を公にされた。我等は先づ博士

の變らざる精進努力に畏敬を感ぜざるを得ない。

第一篇 序 説

第一章 文獻上の記載から見た左傳述作の時代

第二章 春秋の解釋法の變遷

第二篇 左傳の説話と其の發展の徑路

第一章 五霸に關する説話 (一) 桓公説話

第二章 同 (二) 文公説話

第三章 同 (三) 襄公、繆公、莊王及闔廬の説話

第四章 晉楚の抗爭に關する種々の説話

第五章 孔子及び子産に關する説話

第六章 古帝王及び諸侯の祖先に關する説話

第七章 儒教思想によつて作られた説話

第八章 ト筮及び占星術に關する説話

第九章 説話の概観

第三篇 左傳の思想と其歴史的地位

第一章 霸者觀と其二側面

第二章 霸者的戰國的精神と儒教思想との對立及び抱合

第三章 春秋の精神と左傳の思想との一致及び矛盾

第四章 禮に關する二面の思想

第五章 呪術祭祀と儒教道德との背反及び調和

第六章 道德觀及び歴史觀

第四篇 結 語

第一章 春秋の傳としての左傳の特質

第二章 春秋の性質と其の述作の時代

第三章 左傳の思想と前漢末期の儒教

篇を分つ事四、章を改むること二十の此の鬱然たる長論文に於ける著者の主なる意圖は、左傳の説話及び之に現れた思想を戰國より前漢に至る間の説話及び儒教思想の發展史上に位地附けることに依つて、左傳の述作年代を決定せんとするにある。第一篇序説に於て、史記漢書等の左傳著作の由來を語る記事を分析し、史記の左丘明が左氏春秋を作るとの本文を竄入と見なし、司馬遷の時代に於ける左氏傳の存在を否定し、前漢の春秋の解釋法の歴史より見て左傳の述作は恐らく前漢末期にあらんと推定する。右の推定を實證する爲、第二篇に於て、左傳の説話、或は五霸に關するもの、或は孔子子産に關するもの、古帝王、或はト筮に關するものなどを、韓非子呂氏春秋等の先秦の諸子類、史記を始めとする前漢の文獻に見出さるゝ同種の説話と比較し、説話の展開の徑路を跡づけ、之により左傳の説話が、重に史記を材料として更に之を儒教思想により潤色せるものなる事を示す。第三篇は更に左傳の説話を貫いて表現されてゐる思想を或は霸者觀、或は禮樂觀、道德觀、歴史觀等に就て、その形成を論じ、戰國以來漢に至る間の儒教發展史上に位置附け、古き戰國の思想發展相と共に漢代の新しき儒教發展

相を含むことを指摘する。

左傳の製作年代に關しては、その天文記事の解釋を還つて之を戰國中期とする新城博士と前漢末期劉歆の手に出づとする飯島博士との論争は著名であり、津田博士はその點に於ては飯島博士に左袒せられるのであるが、その論證は全くの獨特な方法をとられる。左傳の著作年代に就ては、唐の啖助以來頗る異説が多いが、劉歆説の提唱は清朝中期以後に勃興した今文學派にかゝる。左氏春秋考證の著者劉逢祿は、司馬遷が春秋時代の主史料を左氏傳と呼ばず左氏春秋と呼んだ事から見て、春秋時代の説話集の如きであつたらしいが、前漢末劉歆の手により春秋經を解釋するものとして、種々の義法を附加し、編年的に整理されたと主張した。然るに史記の内には、他の公羊穀梁二傳とは異り、左氏に一致する春秋の解釋法が存在するので、清末民國初の崔適は、之を劉歆による竄入として説明するに至つた。一般に劉歆の左氏傳著作説をとる今文學者も、左氏傳の原稿本たる左氏春秋が司馬遷の時代に實在し、その史料となつたことを疑はない。津田博士は大膽に史記の左氏春秋云々の一句を劉氏による竄入なりとし、司馬遷時代に於ける左氏春秋稿本

の實在を否定し、左氏傳は前漢末期の儒者により、史記及び戰國諸子を材料として編纂せられたと説かれる。もし之が成立するならば、嘗に左傳著作年代の一説たるに止らず、春秋時代の歴史解釋に就いて根本的な革命を將來する大問題である。然し此の點に關する博士の辯證には、既に三田史學第十四卷二號に杉本忠氏が正當に指摘された如く、幾多の難點を包藏し、到底無條件に受け容れ難い。史記に於ける春秋時代の記事に就て、現存の呂氏春秋等戰國諸子類以外に現に佚した何等かの文獻——それを博士は史記に見える春秋の名を冠する諸書に宛てられる——の存在を許容しつゝ、一方史記と略ぼ一致する左傳の記事を大部分直接に史記のみより導かんとして、以上の如き史記の材料となつた雜春秋書を所謂左氏傳作者の劉歆等も見た筈である事を殆んど忘却された如く見えるのは頗る遺憾である。史記にも左氏傳にも共通な現在不可知の大部な資料の存在が何等かの意味で假定せられねばならない以上、史記の所謂左氏春秋なる左氏傳稿本の實在を假定する方がより自然ではなからうか。史記と大體一致する左傳の記事を主として史記から導き、その儒教的潤色なりとせられる博士の論證自體が、種々の不

整合を一篇の内に産み出してゐる。左傳の説話及び思想に於ても一方その戰國的なる發展相を指摘しつゝも一方史記と連關する限りに於ては常に左傳の後行性を固持せられんとする點に無理が胚胎するのではなからうか。津田博士に於ては明治時代に舊來の漢學に對して獨立の旗を掲げた東洋史學の主要なる潮流たる啓蒙主義的な合理論が最も極端に現れてゐる如く見える。博士は「春秋はその外觀に於ては歴史的事實の記録としての形を具へてゐる。しかしかゝる簡單な記載では記載せられてゐる事件そのものがわからず、従つて歴史的事實の記録としての意味が少い。魯の公室にもし、記録があつたとすれば此やうなものではなかつたに違ひない。」(六九二頁)と云はれてゐるが、茲に近代の合理化された歴史觀、整然たる歴史記述を其儘に古代にも假定する輕率な合理觀がある。竹書紀年の如き稍整理された戰國末期の歴史記述に對して祭祀、會同、盟誓、赴告を單的に無選擇に記した春秋に於て(固よりその間に多少の儒教的名分論による附加があつても)支那歴史記述の或る原始形態を見得ないであらうか。左傳の説話を史記を材料として潤色したと説明せられる所にも、左傳の一見曖昧な、而も獨特

の敘述に對して、史記の明晰な合理的敘述を偏愛する博士の合理觀が存在する如く見える。

以上は一讀評者が此の博士の強烈な主觀に彩られた本篇の論證一般に關する一二の不満を記した。尙左傳の如き歴大なる史籍に對する本文批評は實に困難な事業に屬する。然も單に量のみならず、文獻學的にも晋の杜預によつて單行の左傳を編年的に經と合併して作られた春秋經傳集解以前、後漢の賈逵服虔の古本の面影さへ殆ど見得ない現在に於て、更に劉歆の左氏傳を論じるのは細部に於ては相當な危険が伴ふのは勿論である。史記、その他の古書に就ても同様な缺陷がある時、極めて複雑な手續きを必要とし、この事業は更に困難を倍化する。然し博士の結論の當否は兎も角、普通にはその記事を殆ど實録の如く信ぜられてゐる左傳に對して、之を説話としてその展開の徑路を求めんとする方法自身は、その全篇を通じて到る處に現れる博士の獨創、通見に對する大膽な反逆の試み、例へば尊王攘夷の英雄たる五霸の武力を誇る單なる侵略君主としての眞面目曝露(その當否自體には尙多少の問題を残してゐるが)の如きと共に、近來不振沈滯の我支那古代史學の慵眠を喚び醒す快著たるを

失はない。

(小川
茂樹)